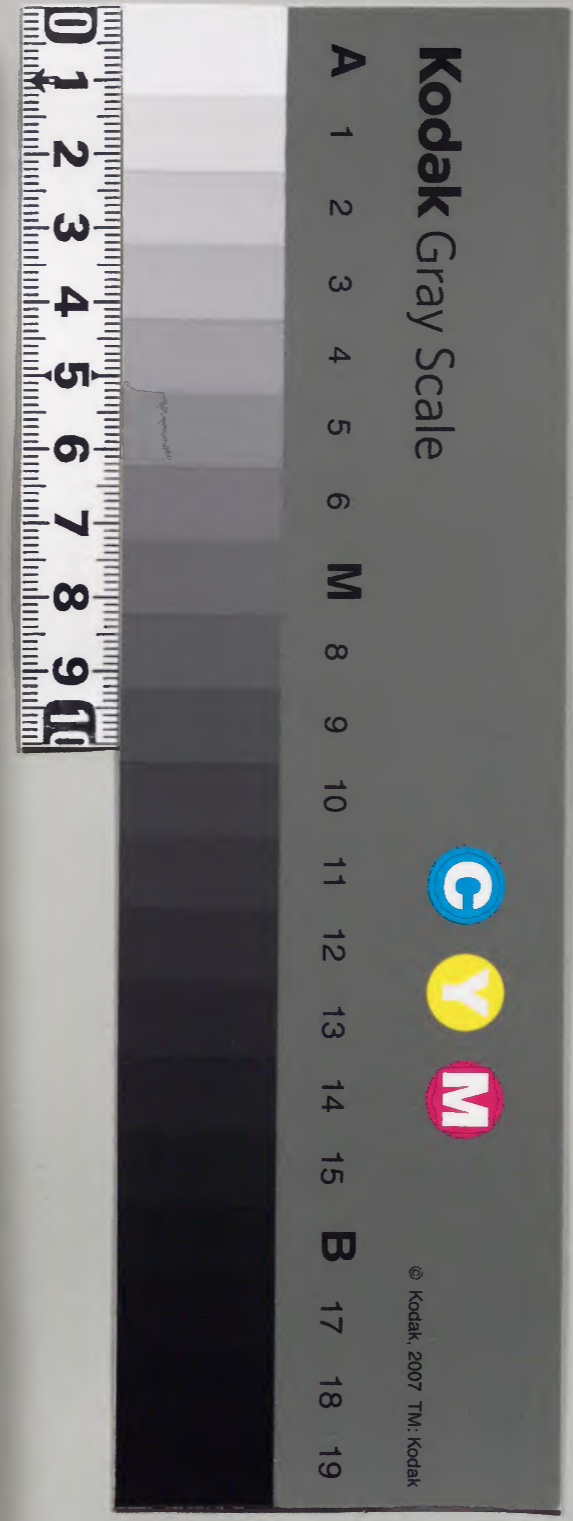


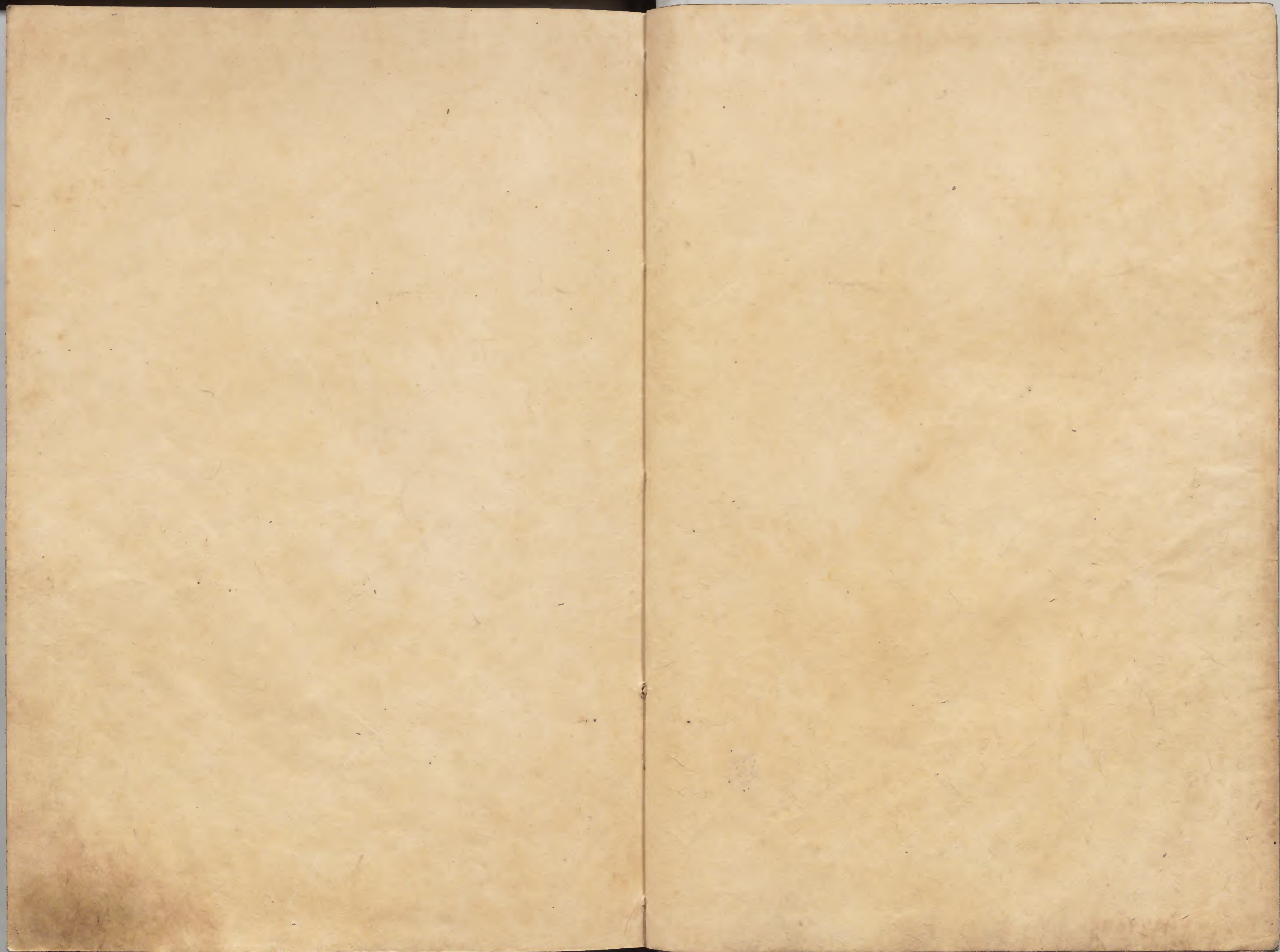
48

寛永諸家譜

清和源氏辛七冊之内
義光流之内小笠原

内閣文庫		
番	和	20199
冊數	186 (46)	
函號	76	1





お探も 甲斐も 法名榮曾

高倉院の時みことありなりて小笠原

此院と始り甲列の刺史となす

弓馬小達一統法よ書すふ故よ此の

人これ道成河びりらぬ

建久六年頼朝卿入海の時書信

と頼朝卿東大寺と造受一徳物小

命して宣天王の像と書きし

と此書信もその一像と書きし

御材の形なりけり朝は奏して書

ぶのり海陽東山におく寺院とは

いめく書信寺と号せ

承久年中無執たれは武勇としげ

よ忠切の形なりけり宣旨と号し

河波のよれも後職と下したまひ家傳

ふいしくじり神功皇后之御とた

げなふと此王の宮内にて懐れ故と

今此松皮と号すなり

後冷泉院の沖亨康平（後）中源頼義
了物して安陪貞信（の）系伝と珠
す物と此（後）月信（の）たりていさまたい
ららふ（の）ありては（の）又新羅（の）之師
義光（の）物して明（の）一り發向せ
し此（の）と此沖門松皮の蕪と義光（の）
た（の）義光（の）奥列（の）よ（の）お（の）し（の）ま（の）く（の）義
家（の）と（の）ま（の）よ（の）何（の）ひ（の）と（の）り（の）て（の）大（の）一（の）り（の）揚利（の）と
得（の）ら（の）義光（の）より相傳（の）して相換守

書傳よ（の）い（の）ふ（の）の（の）り（の）が（の）ゆ（の）へ（の）一（の）り（の）松皮（の）と
く小笠原（の）家紋（の）とす

今按（の）じ（の）ら（の）ふ（の）義光（の）奥列（の）よ（の）お（の）し（の）が
義家（の）が（の）ら（の）り（の）ふ（の）東（の）行（の）と（の）ら（の）り（の）と（の）お
り（の）ひ（の）く（の）あり（の）と（の）ま（の）この家傳（の）よ（の）物
自（の）れ（の）の（の）い（の）ふ（の）より東（の）登（の）よ（の）う（の）わ（の）て考
へ（の）か（の）す（の）ば永保（の）三年九月義家（の）奥
列（の）少（の）く武衛（の）家衛（の）と合戦（の）の（の）と（の）此義
光（の）東（の）行（の）一（の）り（の）何（の）り（の）て（の）た（の）ま（の）傳（の）尉（の）より

長孫 なごん

けり傳方之朝廷警衛の南友と稱
して弦鼓と殿上ともいふことひう
の奥列に下向すと云ふ志は勅
許し河らざるものけり

源太郎 恒正位下 孝仁も

高倉入道と号して 法名長禪

取元中實朝に侍り

六波羅評定所 河波玉の右後職

長忠 なかと

次郎 恒正位下 善原頭 甲斐守

法名兼蓮

長政 ながまさ

孫次郎 恒正位下 彈正少弼

甲斐守 法名長河孫

長氏 ながうぢ

長五郎 後日位下 彈正少弼 だんしょうじゆ

治戸大権 甲斐守 法名長運 ちやうえん

宗書 むねあき

孫次郎 後日位下 信濃守 藤巻 ふぢまき

号寸法名順長 ごうすんぽうなむら

尊氏卿 勅ふりて 関東小發向

お孫次郎時行と征代の時書宗書

小たふりて詞よいく ことば

朝敵追討之事 勅命下りる系 あそこのけり

作子相繼一族合のりんが意 あそこのけり

とく

五月十六日 高氏判

小笠原信濃入道友

関東合戦事 子公早 弟建 弟建

系為 悦作

六月 高氏判

小笠原信流入府

貞宗

高氏即 垣之位 信流高 信名系正
 兵部左の地歌職 建武の武若下
 建武三年高氏山門とせし家と貞
 宗陣と河野野海藤原一 張て
 湖上信流はあはともめ 山徒成願坊律

師とらとら志う海よ作本信流判友
 入道乃参河判のち護職河中う海
 れと貞宗と海寸高氏直義貞宗
 う戦功と感て書とたよりのう此詞
 小い

新田義貞以下凶徒等事度
 合戦毎度亦後平物中 去月
 悔り来るく名伯耆高去年并
 解黨教子人或討取之或生れ之

弓山門之軍 踏お跡く分不幾く
上と物多し 没落物又為港人取
暴也 實如風少 志義 貞以 下 下
没落東國云 自東玉山乃之
馳参軍 暫と居 住近江國 打止湖
舟之 性反及 各報 打取 没落軍
踏く 由 了 和 觸 山 道 海 乃 尋 跡 之
衆 必 伴

建長二年七月五日 高氏判

小笠原信徳書及

昨日十五日 注を 付らる 十六日 刻
到来 押去らる 取お 野海 藤原
打揚山 徒成 頼坊 同十日 お鏡 宿并
伊吹 大平 与 安取 没合 戦云 軍忠
之 至 跡 心 神 妙 也 押 又 東 玉 軍 坊 を
日可 系 海 之 弓 踏 多 指 下 及
之 沙 治 可 若 是 軍 坊 於 近 江 海 志
相 副 近 江 伊 坊 安 國 軍 坊 依 本

作渡判友入乃道登且返治凶徒且
可敬けいご固東迫こくとうしやくに由被よ修下事
同謀どうぼう伐彼凶徒等ら罪連つら又海またうみに状
如件

建武三年七月十九日 直義判

小笠原信清書

同年八月廿五日義貞よしのぶのつと没落す
時小笠原貞宗よしのぶの命いのちして勝かちぬれ楊やう
東坂ひがしざかに發向はつこうとるに由よしとつく

うの書小いづく

今日けふ女におのり凶徒けつとら等ら殺ころす人被ひと殺ころす
伐きり中ちゆう八幡やっぺん路ぢ大おほゆ人ひと
被ひ殺ころす前まへ被ひ殺ころす義貞よしのぶ以下
軍没落きんぼつらくのつと、急渡いそいで世田橋せだはし可か殺ころ
向むか東坂ひがしざかに状如件

建武三年八月廿五日 直義判

小笠原信清書

曆應年中貞宗よしのぶと海うみにて直義判

福^{ちち}らるるは法^{ほふ}橋^{はし}とのりく^り長^{ちやう}家の^け定^{ぢやう}

式^{しき}とな^なり

初^{はつ}後^ご醍^{たい}醐^ご天皇^{てんかう}御^ご時^{とき}貞^{せい}宗^{そう}禁^{きん}律^{りつ}よ

出^で入^いへ^へ河^かの^の水^{みづ}を^を以^{もつ}て^て射^や法^{ほふ}禁^{きん}つ^つよ^よら^らる^るを^を

一^{いっ}め^め河^かの^の水^{みづ}を^を以^{もつ}て^て射^や法^{ほふ}禁^{きん}つ^つよ^よら^らる^るを^を

う^うれ^れ急^{きゆう}遇^ぐよ^よ河^かの^の水^{みづ}を^を以^{もつ}て^て射^や法^{ほふ}禁^{きん}つ^つよ^よら^らる^るを^を

是^{こゝ}より^{より}佐^さ之^の宗^{そう}よ^よら^らる^る後^ご大^{だい}鑑^{かん}福^{ふく}師^し

の^の室^{むろ}よ^よ入^いり^りか^か子^この^の礼^{らい}法^{ほふ}は^はな^なり^り泰^{たい}山^{さん}

正^{せい}宗^{そう}居士^{こし}と^と号^{ごう}す^す信^{しん}列^{りやう}伊^い暖^{なん}ら^らの^の店^たよ

お^おお^おく^く禪^{ぜん}刹^{しやく}と^とほ^ほめ^め用^{よう}者^{しやく}と^とな^なる^るに^につ^つけ

大^{だい}鑑^{かん}福^{ふく}師^しと^と用^{よう}山^{さん}の^の社^{しゃ}師^しと^と守^{しゆ}ふ^ふが^があ^ある^る

氏^{うぢ}寺^{てら}と^と称^{しょう}して^てい^いま^まふ^ふお^おね^ね續^{ぞく}と^と

貞^{せい}和^わ三^{さん}年^{ねん}五^ご月^{げつ}五^ご十^{じゅう}六^{ろく}歳^{さい}少^{せう}く^く逝^{せい}去^こ

送^{そう}葬^{そう}の^の夕^{ゆふ}御^ご史^し臺^{たい}よ^よ勅^{しやく}し^しく^くあ^あら^らは^はし

監^{かん}護^ごせ^せし^しむ^む時^{とき}の^の人^{ひと}乞^ぎと^と榮^{えい}と^とす

政^{せい}書^{しよ}

孫^{そん}次^じ郎^{らう}

后^{こう}上^{じやう}位^い下^げ

右^う大臣^{だいじん}

兵庫頭 遠江 信濃 信名
去也

觀應元年 高氏が軍に備男右衛門
直冬肥後守に没落して國中に轉じ
輝起せしむるがゆへに軍統は高氏
向と高氏より信濃へおろすのと記書
と政もふたよりうけつりいづく
九列轉起事 直冬稱沖之右衛門
七年 高氏依りて高氏お教不審所

高向也子お得一族并信濃國之地
頭沖家人高下信守上國國并
被高下分交名記文或通遣之守彼
状可沙詰之状也

觀應元年十月廿一日 高氏判

小笠原重頼書及

同二年七月に高氏督直義判發して
高倉禰つと号す高氏と敵討し
越前此高下没落のとは記高氏より書

とたまり候

高倉禎たかくらねのたか下した向むか小玉こたまととる遣つり使者しや了り

得えた右みぎ重おもつ被おほ給たまへ申まを先まづ度たび降くだ

御ご津つ教け書しよ為な礼れい入い南なん玉たま志し切き塞さい通つう

臨りん可か致ち防ぼう我が旨しよ不ふ相あ觸ふ一い族ぞく并なら地ぢ

頭とう津つ家け人にん為な相あ又また自みづか然しか後のち玉たま打うち入い

上かみ野の玉たま若わか率りつ軍ぐん場ば馳は向むか皮かわ取と可べ

抽ひ合あ我が忠ちゆう節せつ一い状じやう如ごと件けん

觀應二年八月十日 高氏判

小笠原を以て書す

同十月たいしゅうがつ由よし義ぎ越え前まへ玉たまりり鑑かん念ねんよよじじううん

ととままりり此こゝ政まつりごと事ことをを以もつてて一い切き塞さい通つう

御ご軍ぐん感かん悦えつななめめああららすすてて二に一い回かい

書かととたたままりり候こう

御ご色しき状じやう披ひ見みるる忠ちゆう節せつ一い玉たま持もち心こゝろ神かみ

妙たう高かう倉くら禎ねん門もん身み小こ玉たま関かん東とう下した向むかへ

有ありりとと書かすす一い族ぞく并なら分ぶん玉たま軍ぐん場ば切き塞さい通つう路ろ可か致ち我が功こう一い状じやう如ごと件けん

観應二年十月五日 為氏判

小笠原を以て為教

同年十二月

正平六年

為氏忠義と追討の

ため鎌倉より發向のしに政長佐列の

河りて戦馬成りしことよりわ為氏駿河

より感状をたまひ給ふ此詞より

いづく

去十日河を杖披見平佐列出後志

討揚沙方討揚作榮忠節と云

先づ 祚妙也仍お追治富士川出後今月十日
於由以山を陣平徳ら去十方お藤原
河原凶徒殺百人討揚沖方打揚平
追治相抄凶徒急可る發向関東不廻
時日可孰泰海及ら心平

正平六年十二月十五日

為氏判

小笠原を以て為教

同為氏自筆の書小いづく

十方の合戦よゆいづらんがらあくら

ひとしきも様大せいのゆいといふ
このたへうのまゝでよせんよの合
戦もくひいさきくも場らん
この合戦のらう小なれりし玉の
ふまゝいでぬやいんも道しとい
うきくもせりし終りし様くこ
乃合戦きう小のりもやよあせ
らまは

十二月十九日 為氏判

小笠原重信書

又書りいしく

沖敵等取已後河内国房山
合戦すおらぬやお増一族去國中
地頭沖家人等不廻時刻可決
く休め件

正平六年十二月十七日 為氏判

小笠原重信書

文和二年七月政事番坂重信書と退治

乃この伝列に發向のとき此を氏より書
きたまり家より書ふいりく

伝信國番坂英作も下凶徒為對治
發向く衆む心非妙也亦不致忠節と
伝此件

文和二年七月五日 為氏判

小笠原も存物及

同日午に月政も伝信の玉におめく
上校も存物補傳縁次郎等とおつて

傳利とう海乃しほをーけし軍
義詮より回書きたまり

上校兵庫助補傳縁次郎も下凶徒為
ら合戦由り去月十六十七あり戦功
伝を伝披見記致忠節もく心非
妙也實お玉人等不系軍も有
傳沙治て浪津交名お妙敵陣城
為者不日可對治も伝此件

文和二年七月廿六日 義詮判

小笠原右衛門助

長基

孫次郎 佐佐木下 兵衛助

彈正少弼 法名也 法名清順

長基院と号す

觀應三年為氏より佐佐木の五代

長基院の御書一通是なり

延文元年義詮より給り御書なり

長秀

次郎 佐佐木下 兵衛助 修理左衛門

信濃寺 法名正捷 大通寺と号す

永徳三年二月ア方父長基より熱願

職を譲り河より家系を教へ下り

河より其の奥書の略より

右取領者お副沖下文并代より續

記文等取領者長秀也其より代

あはれ秀正男子志金才士用大丸
譲与敢不守譲他人の为後日以自業
取譲状如件

惣永六年冬大内公義弘和泉の増少
おたふすも此御軍義満より自業
此書は秀正より譲り給ふに
何れも承取同知と申して
さへいづら大さほくは
一河りれりくうまのてま
り

まのいづら大さほくは
たぐしうまもまのいづら
り

惣永六年十二月十日 義満判

小笠原信乃書

英徳の玉中河の比次職信徳の玉佐吉
の店去迫候也秀正宛のしり義満
より給り二通の書およりび義持の書一
通河り

彦太郎 後位下 右馬助 治部左衛門

大膳左衛門 信徳忠 法名正透

應永十二年 兄忠秀が勲行職とゆり

河子次遺書小いり

信与金才右馬助政康所

可之辨恩在中領忠貴之代為右依

世上忘刻且暮難約しる願之儀状

変也忠秀実子お身とけ儀状不立

禮文之時不可有違礼若也為至

実子者但亡父清順之遺文より自政康

可之相續一治次政康以後之實子若

自政康も金兄接广も其の如く嫡

男可儀与彦次郎仍為法日儀状詳

應永十二年十一月九日信徳前司判

應永年中 政康或田陸奥等と同しく

関東小發向して戦功として子時義持の

軍より給り感状一通是有り

同以義持信忠と史料取在願ふ由

より政康より給り此書なりとびよ感状の

回を發せしむるの書二通是有り

永享の申義教の軍兵忠と此地及

職を政康よりへけけ又作行の坊と

して関東より發向すむるの書二通これ

有り

同日より関東發向のよりよはねと上校

安房守の坊として軍忠といふとむる

の書一通是有り

同日以政康信列是生面別府由城と

せめおとして我切何のよに義教より感

状なりとびよ久國のたりともいふと

此よりいふ

越知河差寄祿津政康是生面別

府由城より此の祿妙のたり一腰を

乞作也

二月六日

義教判

小笠原治平右衛門尉

同じく信列海野合戦にともき政康
孫利とゆりふりて感状なりびよ来
國光のたりとゆりふりて書よいん

と度射祢津海野合戦に討致忠臣

親於被友人為被征く由候を来

に牙を神妙仍た力一勝遣之也

五月十八日

義教判

小笠原治平右衛門尉

同じく信列小笠原にともき政康
退治のた政康が武略より苦田治系
す是より義教感状なりびよ真忠
た力とゆりりりて状ふいん

華田下野も事と治系に由候を

あまを神妙仍た力一勝遣之也

八月三日

判

小笠原治平右衛門尉

同じ比政康越後の公よ發向して村と
申物大物とお戦く勝利と均らり明が
ゆへに感状なりとびよ貞宗の大方版巻
と給りりる此書小いよく

村と申物大物及合戦く交討に越後
の勝利と多し玉中静禮く基も
多しに仍大方一腰版巻一願墨筆遣

と也

十二月廿日

義教判

小笠原治部大物金道友

同十二年五月下総公よ發向して臨城
れ敏とせし海時政康副將軍此号となす
りて凶徒とせめりら持氏の息者五丸
安五丸と生揚て徳列金井よおわくこ
も爪珠とその忠賞よりの感状なりび
小友成の大方と無とと給りりこも快り
いよく

今度臨城敏事即時政康出後等

建討物刺屠王丸安王丸平良略
一勝造之也

五月廿六日

義教判

小笠原大膳大史合友

宗康

五郎 恒五位下 大膳大史 信德為

法名 宗順

永享十二年父政康よ志こつひく強城
此戰場よおのじき疵とつうの忠切
小より義教感懐なつびよ益光の太刀
をたもふうけ状よいつく
諸城敵事即時攻落自刃并被
友人為被疵し兼尤ら感思食作
の大方一勝造之也

五月廿六日

義教判

小笠原五郎友

文安二年 不康持者と相願職は相編
乃禮文とつく是と決と不康け禮文
と可揚と

光康

六郎 信忠信下 信忠信

法名法建

父政康兄不康が遺書とつく相願職

と信りといふり
亨徳康正也福寛正のる相軍れ命に
より岡東の發向一 新田治部大権
属して越後よ發向一 村と吉部相揚と
正治一 又本尊と加増と一 徳川の凶
信といらとり我切とぬき入いし忠節
とくひもすゆ義政相軍より信り
感書之通こすけり

家書

六郎 坂上信下 丸場つ休 甲斐守

法名普治

文明五年義政の命ふり弟信成は
小おとしき教ヶ取れ城とせおと
敵教軍とらり家書が家人に
けり家書は軍功と感て義政より
書と家書なび家人の中へたより

同日比義尚の軍に命より信成の
後よりら關東の強敵とたけり戦功
とらりそのとら義尚感懐して書二通と
送りけ

定基

六郎 弾正右衛門 兵庫助 丸場つ休

甲斐守 法名禅忠

文書の中義尚の軍より送り書あり

けきば

大権現うれ心ざしと感懐一掃不すか
くら人質とゞく志志の志家と
すべふらじの 釣命ふら書子と命志ら
ふなりて神くお湯と

同年七月

大権現軍と甲斐佐徳のあまよか
たもよれ佐徳 釣命とつらり
先子酒井左衛門忠次よつら佐川

沼沼郡高橋の城よりこせしけ討水
衆氏直が士卒輝起すこまよらて
忠次佐徳高橋より志りどまき甲斐
新府ふらり大道と後河志といはるる
事教日なりとつら

大権現氏と和隆河り甲斐佐徳の
あ四あらく見幕下小属とよめゆり
信州伊奈の甲斐松尾城と佐徳よ
給の家

同十二年

大権現寺に秀吉と島川長久とにお

て合戦乃と此信嚴又忠次よついで

小牧の城れあきり

同十六日 物命よと忠次が三男小

次郎と信嚴が長子とす小笠原康元

信之とれなり

同十八年二月秀吉氏政氏直と酒代

の此信嚴父子と

大権現よとさづひもり先づけとけ給ハ

いそく 相川小田原よ發向す

同九月信列の弟代とありとあり

武列兎玉れ那よりけり中庄の城よて

一石と願と

慶長二年二月十九日卒と五十二歳

法名道也

信之

台徳院殿、野村より東山道と名く御

發向河の御修之又出なまさるひま

信州波祖海よおまじく信之釣會と

うけし海りて信州岩村城のおさ

こして御之りしけ信州書見の城

ふもまの御之りしを鳥の一揆とあひ

たの河之古卒村死しるもの之入庇と

ふもまの御之りし或いお村氏村

よりあるひにえと追りして郷人の離

あす新のとりれが取よ入次是り
よりく後軍信之乃通海ふれ御と名
と得しりうのり

台徳院殿、信州小縣城よりりなま

ま田安房も昌幸と固れ城とまりりて信

きたるより日河の室は信之の御信

友右衛門幸長も戦死しうの外庇と

あふたれ多し一町は岡原の合戦と

ふもまの御之りし

台德院殿法別ほうとくの教向きやう一ひとなるなりにゆ之ゆ又また是こゝ

同十七年

台德院殿だいとくの命のみことよりより武列ぶりく見玉みたまの御ご成なり
あゝあゝ下くだ徳とく生なま着ちやく飾しやくの御ご成なり河かの
城しろよりより行ゆきりり御ご成なりりりてて二ふた百ひゃく石いしの地ちと
し海うみの流なが

同十九年どうじゅうくわねん 同月どうげつ廿にじゅう九く日にち 台河たいがよよおおおおくく病びやう死し
同十五歳どうじゅうごさい 法はふ名な了りやう過か

政信せいしん

伊勢いせ次郎じらう 後立ごたて位い下げ 左ひだり邊へのの作しやく

天文十九年てんぶんじゅうくわねん 十月じゅうがつ大坂おさか参まゐ籠かご乃のはは政信せいしん
少せう年ねん少せうしして

台德院殿だいとくの命のみことににううけけしし海うみりり先せん軍ぐん酒しゆ井い

左ひだり邊へのの御ご成なり次つぎとと同おなくく徳とく列りくよりより東とう山さん

道みちのの屋やととせせじじりりひひ徳とく列りくをを對たいしし

命いのちよりより政信せいしん御ご成なり和わ山さん

此城とまのり大坂和賸と有りて後聖
の玉総列右河より入城
同年三月大坂再亂の時此政信又
と仰ぐ實東より城列より有りて
備よたひらと五月

大権現

台徳院殿大坂御教向れと此又政信
命しと伏見此城とまのり
四月七日大坂落城の役六月右河

へ

元和三年三月

台徳院殿日光御系福此時沙彌と右河の
城よとあたまも還河の時も又志

同五年十月

台徳院殿此御命より右河とあり
玉園宿の城よりけり二万二千七百七
十余石河傾

寛永九年

將軍家此釣命を呼ゆり大坂城乃津島
 此との聖も分國東より出ぬ
 同十二年又釣命より後府の城より
 此の聖も十一月江戸より出ぬ
 同十六も釣命より杉子貞信と政信が
 家督と守主膳貞信是なり
 同十七も七月より江戸より病死す年三歳
 法名瑞雲

貞信

新五郎 主膳

實の末本権右衛門尉貞信が子信之が外
 孫なり

寛永十六年 釣命より政信が家督

とけく

同十七年九月総列國宿所此城は
 此の徳川石津の郡におおく二万二千
 七百七十七石此地はたより高例の城

居

志道二十なつかふりらなつか長清なつかより貞信まことよりまこと
二十代小笠原一流いっしゅうの惣領職そうりやうしやくとついでお継ついです

ふれり

今按いまあむりきよ貞信けいぶが系図けいぶと志道しどうとあ

右みぎとひだり従したがうたおのじり取とれた代よの代院いん

又また教しやく十じゆ通つうういふふ可たなりし志しれ

とも右みぎ道みち大おほ史し忠ちゆう政せい又また信しん信しんもも長なが次つぎ系けい圖と

小こいいんん持もちりり長ながねねもも長なが秀しゆがが子こなりなり持もち者もの政せい

康やすがが嫡ちやく男おとこもも康やすのの持もち者ものがが身みなりなり

松まつ尾お小こ郎らうとと号ごうとと康やすとと持もち者ものとと不ふ和わ

みみとと志し道どうとと合あ戦せんののおおももびび康やす持もち者もの

ふふららとと長なが持もち者ものははおおのの後ご原はら山やまがが執しやく

達たつよりよりりりてていいふふとと惣そう領りやう職しやくととははりりとと

但た忠ちゆう政せいもも次つぎがが系けい圖とのの代よのの血ちゆう脈まくととお

續つづくくとと新しん造ぞうななははりりははりりひひととりりとと

介けい又また曰いふふ康やすがが子こ政せい秀しゆとと持もち者ものがが孫まご也なり

朝あとと志し道どうとと戦せんとといいふふとと後ごとと和わ睦ぼくとと

松まつ家け傳でんのの書しよ籍せき秘ひををととううけけとと銘めい号ごうに

恒と久康が才光康が孫六郎某門
法名徹泉松尾より珍号よりりて家
は氏お傳と徹泉はわ政秀と寄る
あふれ家書流傳して下条より家書
物孫書棟徹泉よりりて是と追前書
棟が次男信定は松尾の城よりりて
是よりりて按じればは禮文は松尾より
河原の河原の貞信が系は久康兄
久康が孫とてりて久康が孫

貞忠松尾の城は恒と子孫おはしく
是は孫とて志すれども政秀徹泉信定
がことも城の世次うけ外は諸お世は事
是れが城の世次うけ外は諸お世は事
すこゆへはあ道と河原の世は松尾の
不問のゆへよりりておれと圖して冬
考いりたるゆへなれども

忠政書次系圖の目

長基 ながもと

長秀 ながひで
政康 まさひで

長持 ながもち
小二郎

持長 もちなが
志政長次郎

宗康 むねやす

政秀 まさひで
長次郎

光康 みつやす

貞信系圖の凡

長基 ながもと

長将 ながまさ
攝子

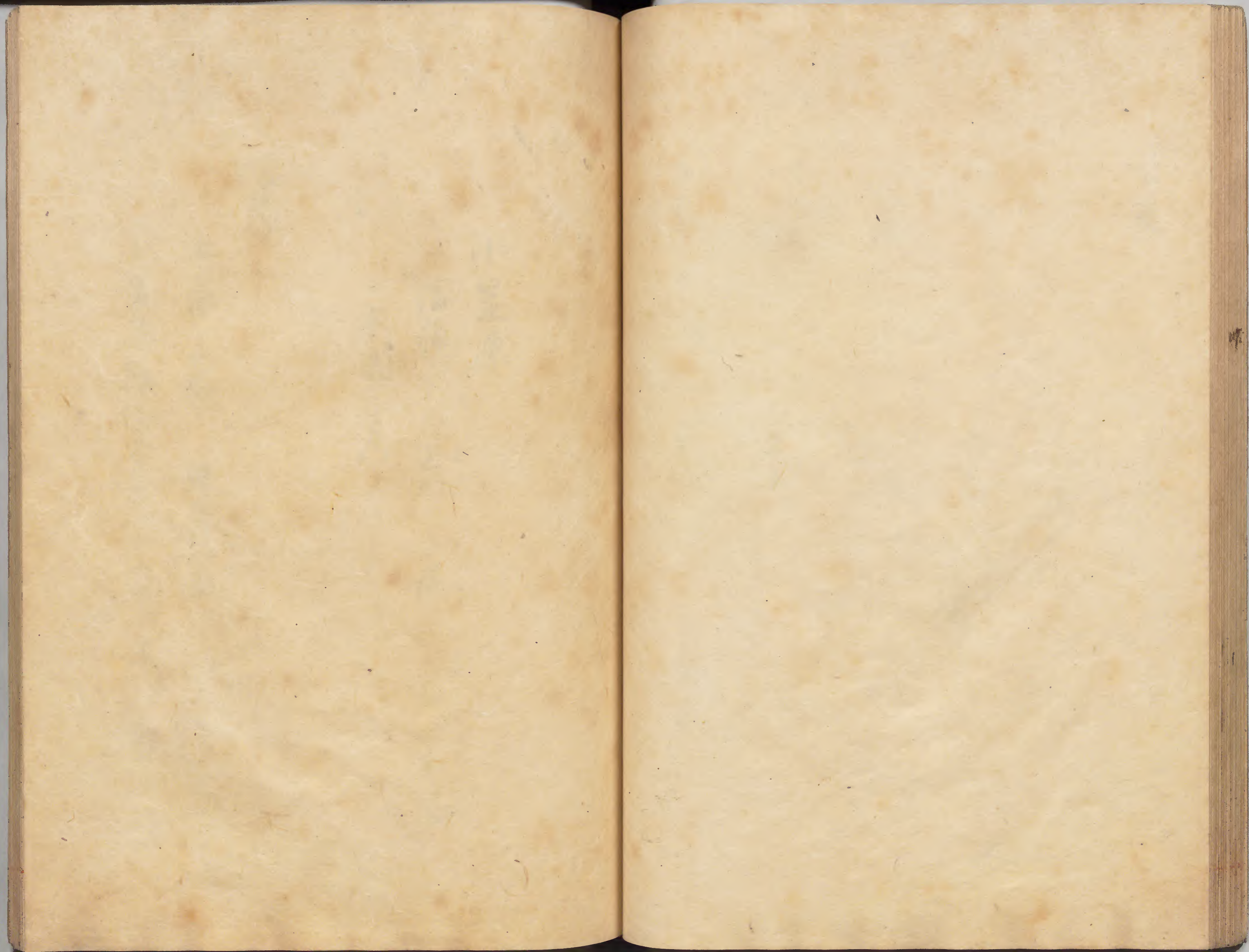
持長 もちなが
長次郎

長秀 ながひで
受長基讓

政康 まさひで
受長秀讓

宗康 むねやす
受政康讓

光康 みつやす
貞信祖



信嶺のり

小笠原

信嶺のりよりとつるま祥しやうのま胎た正せい貞しん信しん
が系けい圖ず小こ丸まるののり

十郎じゅうらう之の郎らう

掃部うべん大だい物ぶつ

信名しん道みち也や

小笠原こがさわら信しん流りゅう忠ちゆう貞しん系けい十じゅう世せいのの孫まごなり

信之

小平次郎 後位下 在出作
法名了温

政信

伊坊次郎 後位下 在出作
法名瑞雲 系圖別よ河

信政

三郎右衛門

寛永四年八月十日初

將軍家とねー

同年十一月御書院と勅じ

同五年御切未立百俵とたまり

同十年武列忠の因あり初り給り給

七百石なり

同十九年疾阿るゆへ御祈禱と酒井

和泉守 継之 属 小善清の 役と 所も

信由

虎助

信統

九十郎

寛永十八年

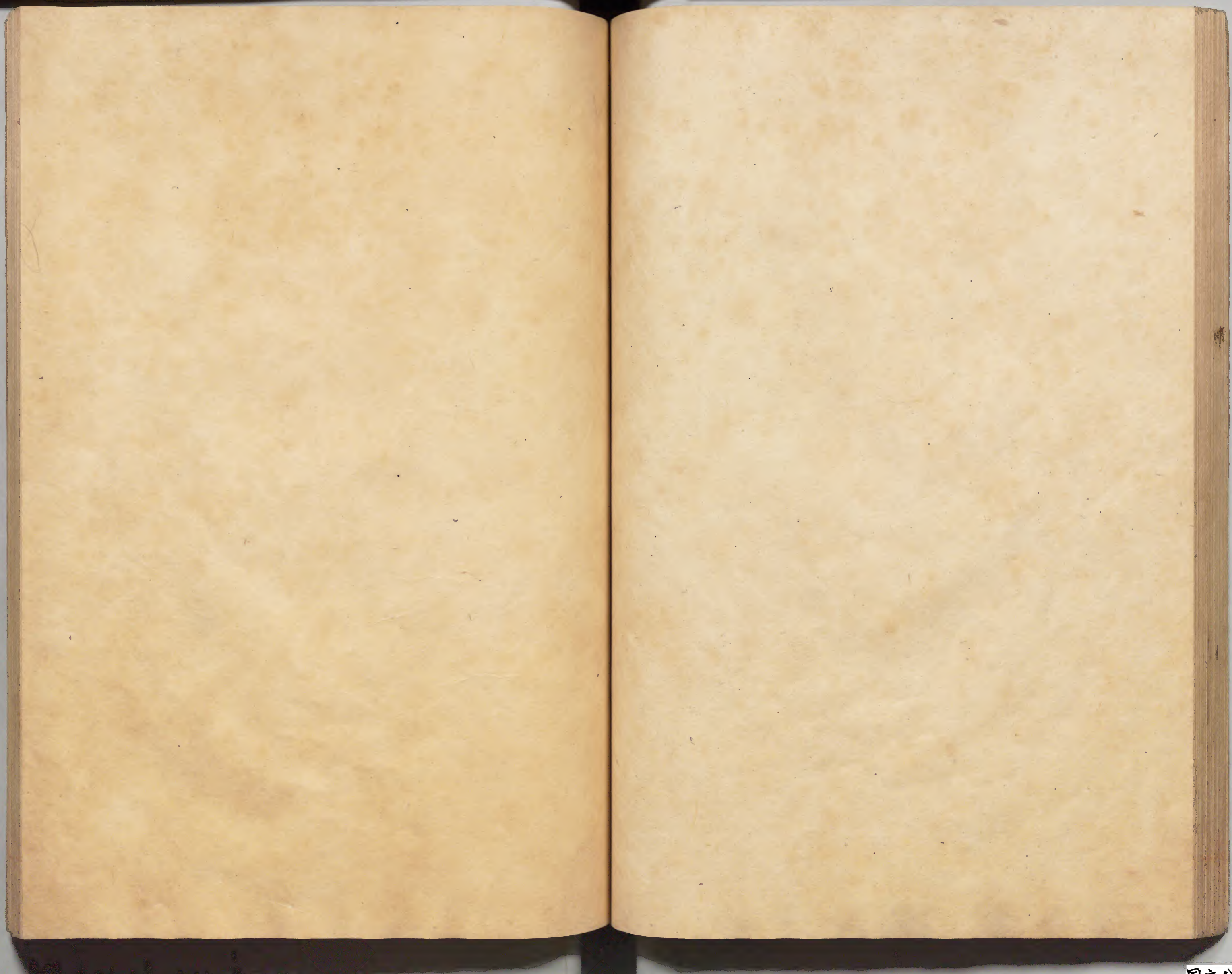
竹子代君 石川 信統の 孫なり

信安

上郎 助

女子

家紋 松皮



信高のぶ たか

六郎むさし

左衛門下總守

信高のぶ たか

宗盛むねもり

信頼のぶより

十郎じゅうらう之郎のらう掃部さうぶ大進だいしん

信高のぶ たか徹とほ列りやう道みち也なり

長治ながち

韃靼たてん尉じ

安永やすえ五年十二月

東照とうしょう大権現だいけんげんの御成ごなり呼よりの位ゐ列りやう伊奈部いなべ

松尾まつおの店たな中なかつと沙汰さたとすすから松尾まつお

乃店のたな小こねねわわくく食く色しきと日ひううららたたままふふ

長重ながしげ

圖書とくしょ助すけ

女子むすめ

春 なやと

靱負尉 ゆきのすけ

良隆 うたろう

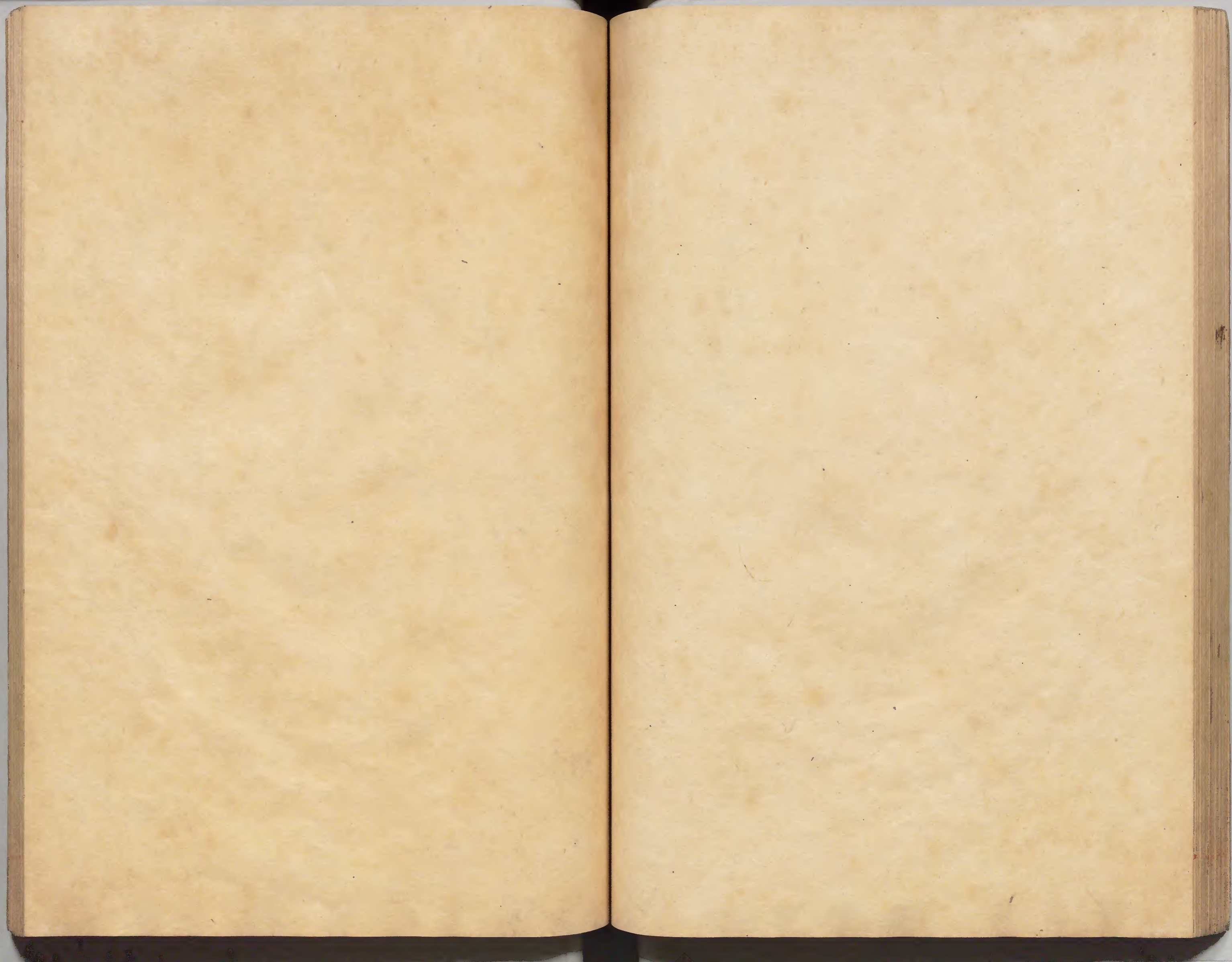
木二助 きのふたすけ

女子

春政 はるまこと

檀尾橋 だんおし

家紋 いえのもん
松皮 まけ



小笠原

先祖せんぞの御み幡はた是こゝ郡の城しろに居まゐり

● 廣正ひろまさ

兵右衛門尉べいゑもんゑい 法名ほふな 紹榮せうゑい

今川いまがわ 義元よしたけよけふ

廣重ひろしげ

長壽ちやうじゆの作のしやく

永祿七年

東照大権現と稱し、まづ幡豆郡よおわ

て領地をたまひ給

元龜三年、三方原合戦の時、濱松城の

御番代行はし

天正十二年、病死。法名榮胤

信元

安藤云々

元龜三年、三方原合戦の時

大権現の侍をよ

天正二年、長篠合戦の時

同日、年、約命を仰り、松平國清も

忠次、小笠原新九郎、安えな、ら、ひ、信元

爲甲列の敵軍と押の、あふを、列

榎原よま、り、兵、事、す、く、よ、六、年

なり

同十年、小田原城のと、く、て、殺、搦

と守りてくを妻のほしむれり此小田
原坊之鶴よ出張して合戦を信えつ
家人小笠原市秀大嶽派吉討死し討
我功を感しおりの富士郡よおむ
千石の加増と給り家之牧橋よ居たり
とてく九と

同十八年小田原陣よ信也す

同年 台命と受けし御前も此役成
勅じ

同十九年奥列陣より信也す

文禄元年名護屋陣よ信也

慶長五年石田三成謀反の時松平又

七郎子咲原を勝小笠原新九郎廣揚

なりびよ信也為 台命と受けたま

り九鬼大隅を嘉隆とていんごるも

列毛呂崎此城とまりり居と

同十七年死す 法名正冊

廣忠ひろたけ

孫六郎 生五子

大権現おほごんげんに流ながるるにありしのの後の 物命ものいのちに

よりこのこ榊原さかきはら式部しきぶにありし病やま康政やすまさにありし属ぞうに

交まじりありし寛永かんえい年ねん病やま死し 法名ほふな 延喜えんぎ 延喜えんぎ 延喜えんぎ

廣勝ひろかつ

孫六郎 生四子

榊原さかきはら式部しきぶにありし大物忠次おほものちゆじにありし属ぞうに

寛永十六年かんえいじゅうろくにんねん病やま死し 法名ほふな 日永ひなが

廣安ひろやす

八右衛門やちゑもん 生五子

元和五年げんわごねん十一月じゅういちがつ廣安ひろやす十じゅう三さん歳さいにありし 物

將軍しやうぐん家け成なりにありし 物

同六年どうごねん正月じゅうがつ沖おほ小姓こせう但たのの沖おほ高たか成なり勅しつに

信重のぶしげ

孫三まごさん

安永八年

台徳院殿と称し、其時、信重廿一歳
同十一年病死、法名清月せいげつ

信澄のぶ

安永あのゑ

安永十六年

台徳院殿と称し、其時、信澄六歳
同十九年元和元年、大坂陣の時、角

信吉のぶ

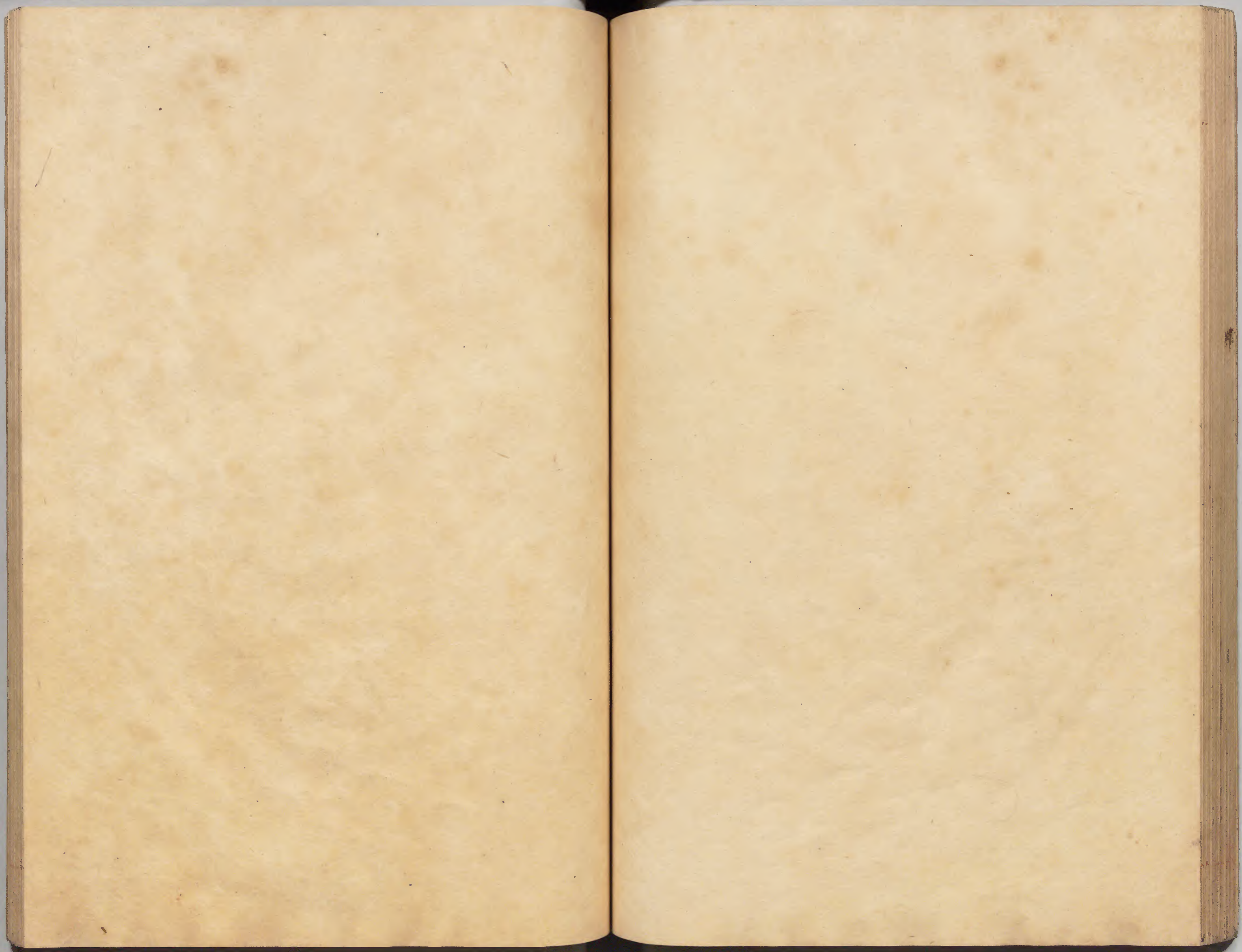
那之崎之水なさきのみづより、番匠ばんぢょう勅じ

七左衛門 生國上総

元和五年

將軍家御前しんぐんけみまへより、

家紋 松皮菱まつかわらび



小笠原

● 安元 やすもと

新九郎 持津守 生國三郎

後列今川氏了り候ふ

永祿七年四月七日

东照大権現と物もの一ひとなり之この所ところ懐なつか豆まめ郡ぐん

小おわくこわく態まじ成なり成なり給たまり候

同十二年十二月

大権現御馬成軍列よあし 御時甲列
此軍士とも軍五子人と結山系是前
わく軍列見付の寄せ来御時よ小笠原
与八郎あし御時と甲列よ通下人質
と此うりすをさしよ御時

大権現きよあし御時よあし 安えとあし
て御時いりくなんらゆひく計略とあし
らし与八郎と御時方よ属とあしなり

安えうけし御時りる伏塚よゆし向あし
小はげくなんらゆひく計略とあし
軍列乃軍士等よあしとあし城とあし
御時方よあしこのゆしよ

大権現御感地よあし御時りる御時
御時赤輝何志とあし村成結りく是と
御地よ

同正十七年十一月晦日病死

安次やすし

丹波守 生玉之助たにのり

大権現おほごんげんより信長のぶながに

安次やすし家いへと嫡子ちやくし安廣やすひろよりゆづり隠居いんきよと

取とり安廣やすひろ之の方かた承うけたまりて討死うちころする小依こよりと

又まためし小依こよりにて

大権現おほごんげんより信長のぶながに嫡子ちやくし安廣やすひろのの家督けとく

と譲渡ゆづり

天正十年 松平國房も忠次小笠原信元

なりびに安次等 約命やくめいと仰おほり小田

原はらに敵討てんていと云いはんごも之の救揚きうやうと守

ふりたともし小田原坊おだわらと云いはんごも之の為ために

寄よりせましく合戦あはせし信長のぶながより安次討死やすしうちころと

時ときは九月廿五日なり

安猪やすし

若之郎 太郎わかのらなる 生國なまくに之助

大権現おほごんげんより信長のぶながに

永禄十二年幸河内然川ひがしにうつり
おわくおわりと河子
元龜三年河内小谷こがに合戦あはれあり
三正之年長瀬ながせにおわく高名あり
同十二年也久子におわく高名あり
道より後

台徳院殿

將軍家へはくし書状

寛永十八年二月乙酉病死時より九十二

安村やすむら

傳三郎 生國氏孫

寛永二年

將軍家とぬき書状

安廣やすひろ

新九郎 生國同前

大権現よりはくし書状

元龜三年十二月廿二日三方原合戦此
と此討死の時十九歳

安勝あかつ

小忠郎七郎左衛門 生國同前

大権現よはくも

元龜三年の三方原戦場よおわく病まひ

叫こゝろゆり行ま歩ぶふかふか路みちようけいけい出仕でつかい

よわじ

寛永元年七十歳しちじゅうさい病死まひにちがひ

廣勝ひろかつ

新九郎 生國同前

天正年中父安次戦死此後祖父安元

鉤かぎ命いのち承ついでけけたまはり廣勝とありはれ

云段揚うゑだんふりり小田原場おだわらばとありこの

召九年めいごうねんなり

大権現おほごんげん言こと勞らうと貴たかしたるひ富士郡ふじのこほり此

うらよおわく妻さい比ひ子こ石いし成なり給たまは

是こゝ又また長なが五ご年ねん石いし田た之の成なり謀まは友ともの時とき松まつ平へい

又七郎子たけ廣孫たけ長清射小笠原信元并
廣揚たけ 上意かみとうけし海り九郎大隅守
嘉隆あきがおおとくらめり尾列毛呂清きより
陣す又大坂本津傳法でんぽう此舟の御ご普
治付しづくら

安永六年七月七日大坂よおわく病死
時ときりり二十一歳

廣ひろ信のぶ

新九郎 生玉上総

安やすハ安揚やすが子こなり叔父おじ廣揚ひろ子こなり
〜病死すしくらゆらめり〜

大権現小言上おほ〜 納命のりふら〜安揚やす
が子こ廣揚ひろ揚ひろがままら〜

大権現よは〜時よ安永六年十一
月廿ふなら〜

台徳院殿小言上たいとく

元和六年えんわ病死び二十に六じゅう歳さい

ひろ
廣正

十右衛門 生國 因前

將軍家より流るる

家紋 松皮

小笠原

系

栴津 生國

系

厚史 生國

義正うしろ

右左衛門 生玉同前

東照大権現

台徳院殿

將軍家より侍り奉る

義次うしろ

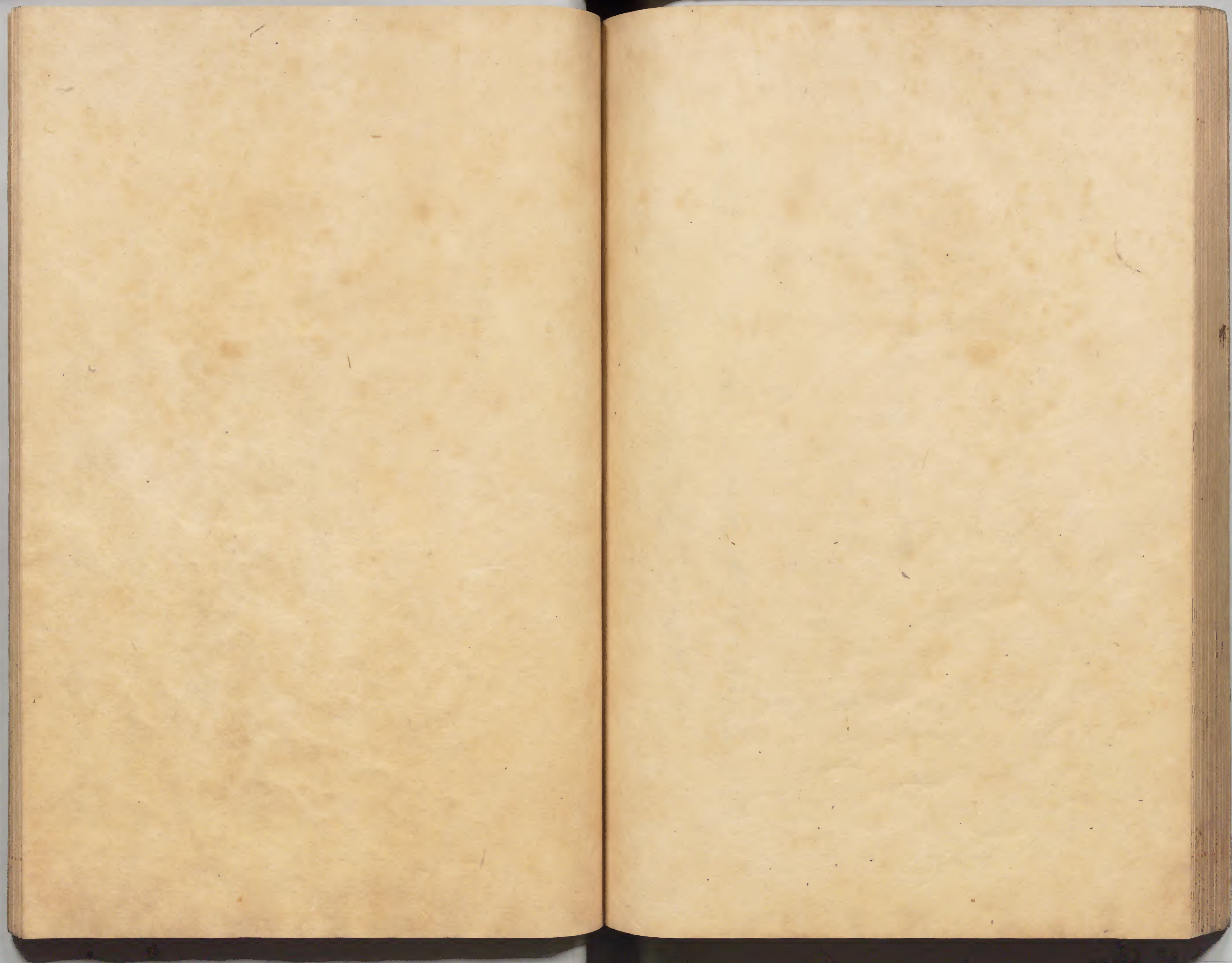
右左衛門 生國山城

實まことハ牧野まきの内通頭うちどうづ信成のぶなりが子こなり

將軍家しやうぐんの御ご一いつ等とうり義正うしろがこきこりとお

所ところなり

家紋之文字松皮菱



小笠原

元續

六郎 六郎少将

室町將軍義隆むろまちの孫まご義隆よしか河野景虎こうのかげとら

乃と此元續このもと是志こころを以もつて忠義ちゅうぎと仰おほふ

すこのゆへに感懐かんわいを給たまはり今いまは是これを事こと

とすむら小田原こだけよおしむき小栗氏おぐら繼ついで

は屬と元續ハ氏綱とありは甥とあり
川くあり

康廣

六郎 兵部右衛門 播磨守

小糸氏康氏政氏直とありは氏直の時

氏直奉命とあり

氏政とあり

東照大権現へ使と献と隣國とあり

ふとさし康廣すかりし使者とあり

淡松へいり酒井左衛門尉忠次とのい

奏者とあり言とあり

大権現とあり守部卿とあり

康廣とあり今とあり

文祿元年京都よおわくは凡人と

政尚とあり

大権現とあり家臣とあり

文祿二年病死時よ六十七歳

小房

六郎 市左衛門尉 縫殿助

小糸氏連より

天正十八年小田原落城の時役取廻の奉

行となりを習れ侍二十余人の頭より

軍よりとお勅し氏連没落して高野

小のり終りし者房是より志しつゝ氏連死

去れ後者房浪人となりし

又福元年京都よりおわく父康廣より

同し

大権現とおも

寛文五年

台徳院殿へ侍入り美田陣より侍なり

同十九年大坂陣より侍なり

元和九年

將軍家より侍入り

寛永五年松平新左衛門光政の家

嫁娶の時も層 後山よりあつて
新波家より河内

長真

源六郎

元和元年

台徳院殿とね

同九年

將軍家より

元定

左門

元和五年

將軍家より

義勝

前田左馬助

前田左馬助義久より

寛永元年

將軍家より侍人並

家紋之文字たぐひ松皮まけ菱びし

小笠原

系

岡藤助 生國信列

東照大権現より之奉納

正直

久左衛門 生國同前

台徳院殿へ侍るも

慶長十九年大坂沖陣と勅めぬ陣

れも侍るを侍る

元和九年沖上洛の時侍も

後府におおく病死す時二十八歳

法名昌悦

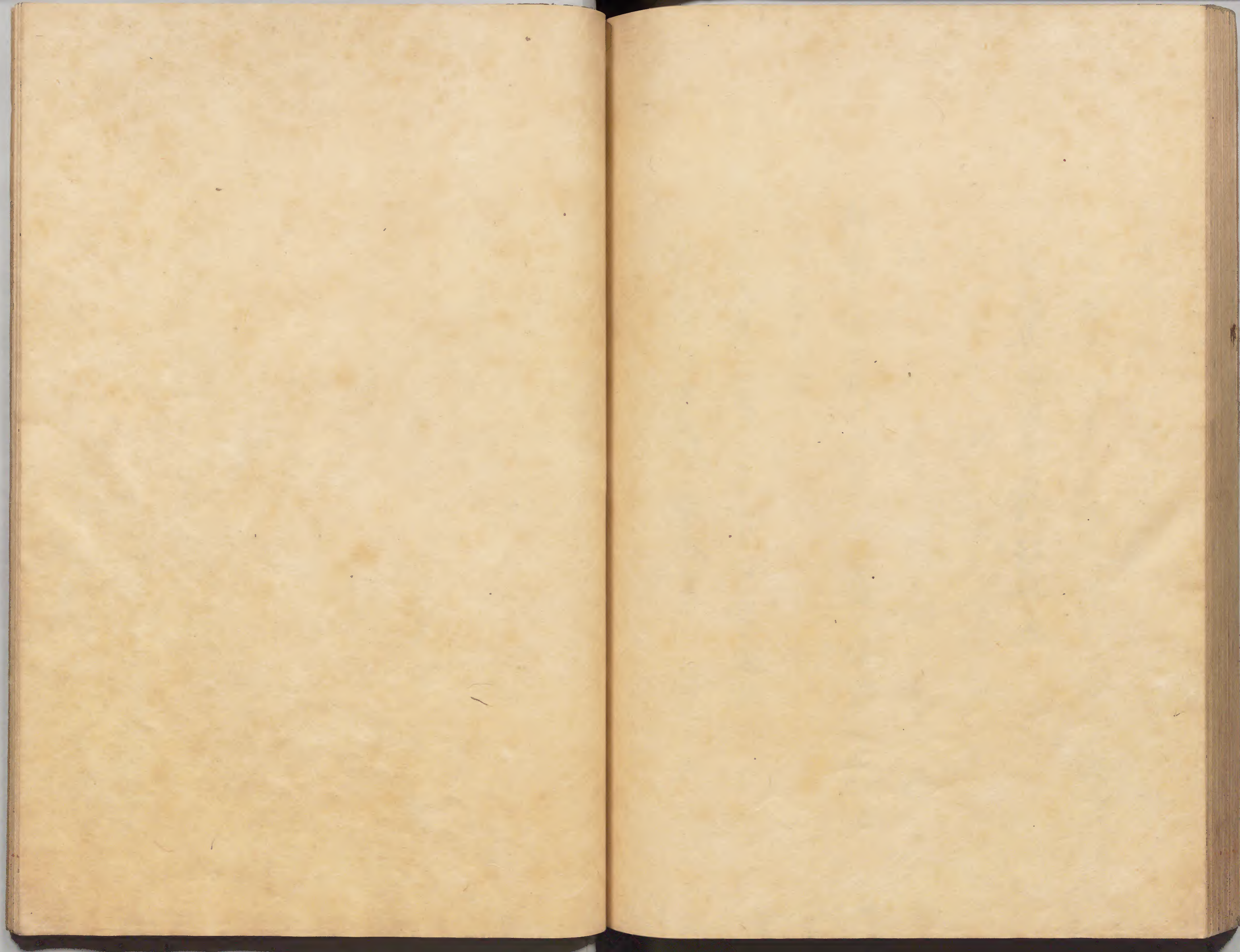
直光

久左衛門 生國武彦

實は上杉家侍の家人幸川越前守直光の子なりつ直光の子なりつて子なり

將軍家へ侍るも上杉家の家督と侍る

家紋丸の内よ之階松皮菱



● 通政

小笠原

貞利まことふらりく河野のふらりく原はらと号なは

河野のふらりく 生國なま甲斐

武田たけだ信玄のぶよしらく今いまあららく小田原のよしらく
小糸こい氏うぢよしらく又また播磨はりまの時ときよりいらり

丁甲列の御り

盛政

河原庄左衛門 生國日前母小笠原氏女

信玄孫頼父子よ侍ふ

天正十年

東照大権現へ百布さし甲列義坂合戦の

とき高名河原原地を相領す

同十二年吉久子合戦の時高名

沖加増相領す

同十八年小田原沖陣よ侍ふ

同十九年奥羽沖陣よ侍ふ

同二十年関ヶ原沖陣の時沖使者

となり沖陣も侍ふ

同十九年大坂沖陣の時沖使者と

なり沖陣場割と侍付り

元和三年病死時よ七十二歳

貞利

小笠原与左衛門 生國武藏

貞利之母の小笠原家とおぼくは

なまきしへ森大炊頭利持と

台徳院殿と言上りし河野とありたぬ

て小笠原と号す

寛文十年

台徳院殿より

元和二年 物命とありし忠兵衛

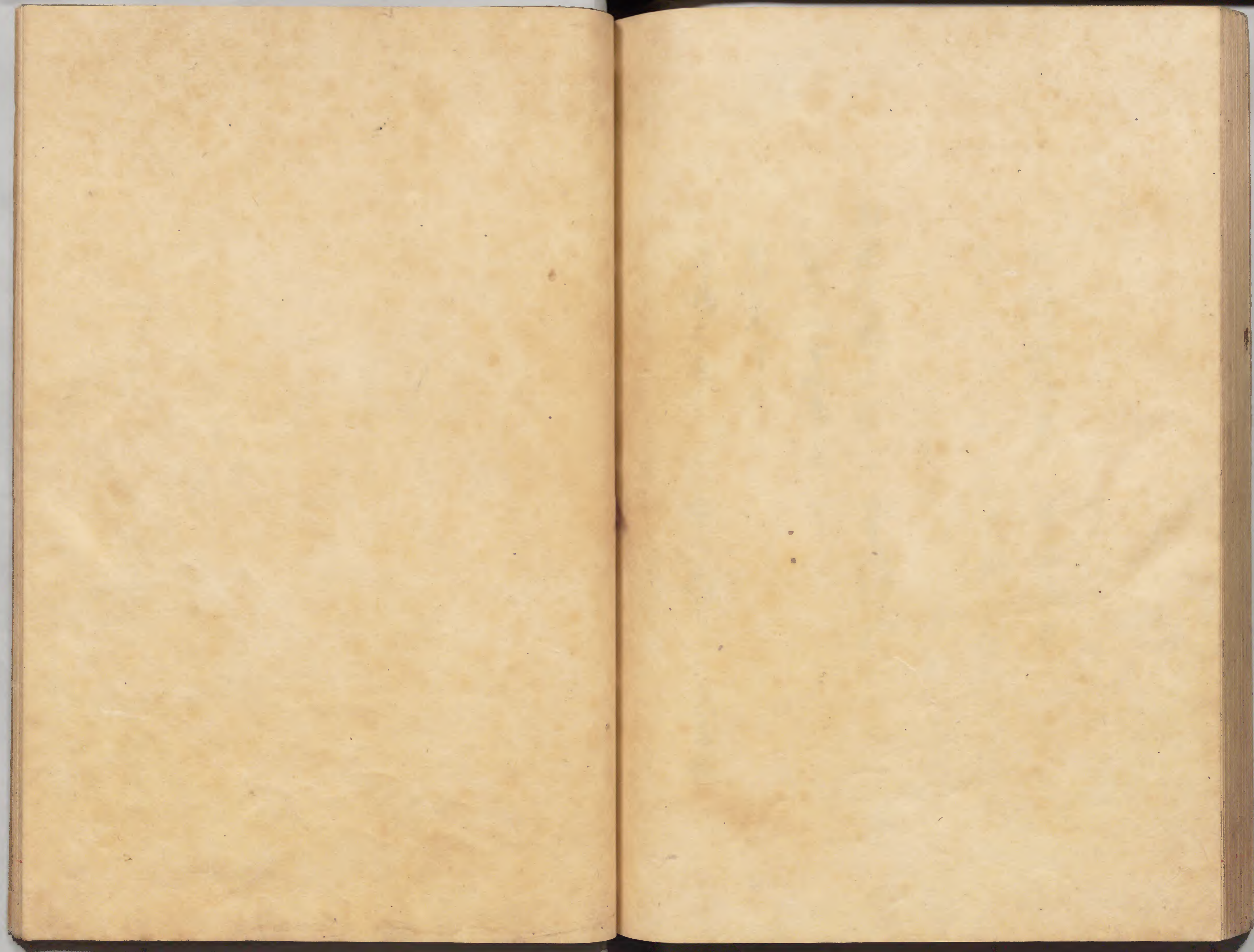
氏

寛永十一年

將軍家とありし氏

家紋 松皮菱

河野氏とありし忠兵衛
氏



● 書法

小笠原

元来赤沢の称今んらいあうざいよりとすりてんをんとんと
小笠原と号す

次郎 信徳寺 法名榮曾
新羅三郎義光より五代後醍醐天皇

長子

源次郎

兵庫頭

法名長禪

清子

源次郎

赤澤伊豆守

豆列赤沢の城に居すこの中より累代

赤沢と称す 法名玄祐

安子

源次郎

治部少輔

法名玄仙

經子

源次郎

武部少輔

法名正沢

氏常子

源次郎

伊豆守

法名宗沢

實は同族小笠原経清の子也

恒頭こゝろ実子まことなりしゆしゆは氏常うぢのつねと成なりて家督けとくと成なりじ

常つね與よ

又また大郎おほらう 伊豆いず守まも 法名ほふな玄徹げんてつ常與つねよ守まもと号なづじ

恒つね光みつ

又また大郎おほらう 治部ちぶ守まも 法名ほふな玄室げんしつ

武たけ恒つね

又また大郎おほらう 伊豆いず守まも 法名ほふな乾岳けんごく

滿みつ恒つね

荒あらい次郎つぐらう 朝日あさひ不ふ説せつ承じやうと号なづじ
法名ほふな玄松げんまう

教けう恒つね

次郎つぐらう 式部しきぶ守まも 法名ほふな常惠つねけい

信列 凍原 原よおわく討死す

經隆子

又太郎 伊豆守 法名普沢

朝經子

魚太郎 澤務軒と号す 法名宗益
丹列久世戸代文殊寺よおわく自害す

政經子

又太郎 伊豆守 法名普忠
信列飯沼の飯よおわく討死す

經智子

又太郎 伊豆守 法名玄沢 生國信列

貞經子

源次郎 伊豆守 小笠原丹次 玄通と

寛永十年

台德院殿子為一生於

元和九年

將軍家一海一生於

寛永十二年八月七日死時六十歳

法名常林見

貞別まこと

丹波たには生國なま成列なり

貞治まこと

源守郎みなもとの生國なま成列なり

元和二年

台德院殿子為一生於

同九年

將軍家一海一生於

家紋松皮まけ副紋ふたご十字じゅうじ字な

